

赤坂小梅と筑豊炭坑文化：新民謡の地域性

大島，久雄
九州大学大学院芸術工学研究院

<https://doi.org/10.15017/2558892>

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告．15/16, pp.45-55, 2018-03. The Kyushu University Museum

バージョン：

権利関係：

赤坂小梅と筑豊炭坑文化 ——新民謡の地域性——

大 島 久 雄

九州大学大学院芸術工学研究院：〒815-8540 福岡市南区塩原4-9-1

要旨：炭坑で栄えた筑豊に生まれ、炭坑文化の中で育った赤坂小梅（1906-92）は、地元の芸者置屋で芸妓として歌を学び、新民謡作詞家・作曲家に見いだされて東京で民謡流行歌手に成り、昭和期民謡・新民謡の確立と普及に大きく貢献した。本論は、田村コレクションの小梅と博多・福岡関連の民謡・新民謡 SP レコードを調査し、小梅が郷土を歌った民謡・新民謡を中心に、昭和期に民謡を流行歌として販売したレコード会社のビジネス戦略とラジオ・映画・テレビ等の新メディアとの関係にも注目しながら、これらの民謡・新民謡の特殊な地域性を明らかにしようとするものである。

キーワード：赤坂小梅、筑豊、炭坑文化、新民謡、地域性

ある地域において特殊な産業の繁栄によって人口が集中し、それに伴い他所から文物が流入して、地域に特異な芸能文化が発達することがある。日本の近代化の過程において盛況を極めた炭坑産業により人口と富が集中した筑豊にも川筋気質と呼ばれる豪放な生き方や独特な炭坑文化が生まれた。¹炭坑の閉山により二十世紀後半、地域は斜陽化し、「文化不毛の地」等とすら呼ばれることもあったが、祭りや神楽等の伝統芸能、嘉徳劇場や伊藤伝右衛門邸や近代化遺産の炭坑遺構などの往時を偲ばせる建築遺産は大切に維持され、今では地域の重要な観光資源となっている。²さらに山本作兵衛（1892-1984）の炭坑絵画が、平成23（2011）年に国内初のユネスコ記憶遺産となり、筑豊の炭坑文化を世界に知らしめたことは記憶に新しい。³本論は、民謡歌手として活躍し、民謡普及に大きく貢献した赤坂小梅（1906-1992）を炭坑文化の中に位置づけ、九州大学総合研究博物館田村コレクション SP レコード調査によって赤坂小梅の新民謡の地域性を明らかにしようとするものである。⁴



図1 自伝『女の花道』（1981）



図2 記録映画 DVD『小梅ちゃん』（2007）

赤坂小梅と筑豊炭坑文化

赤坂小梅（本名 向山こうめ）は、自伝『女の花道』によると、明治39（1906）年に福岡県田川郡川崎町に「九人兄姉の末っ娘」として生まれた（図1・2）。⁵父親権平は「道楽者」で、農家の地主として食べるものには困ったわけではないが、こうめを生んだ十日後に産後の肥立ちが悪く母シナが亡くなり、子供の無い長姉夫婦の家に養子に出される。長姉夫婦の家の近くには芸者の置

屋があった。炭坑で栄えた筑豊地域には、今は寂れた地域の現状からは想像できないが、各地に劇場や花街があったのである。置屋からは芸妓衆の稽古の音が漏れ聞こえ、こうめを芸の道に誘うことになった。自伝によると、学業よりも歌が好きだったこうめは、英彦山の麓の自然の中に日々飛び出して歌を歌っていた。すると仕事帰りの鉱夫達が、彼女の歌を気に入りに、娯楽の少ない当時、仕事帰りに聴きに來る鉱夫の数は日毎に増え、ご祝儀すら出してくれた。歌で生きる道を選択したこうめの起点は、炭坑で栄えた筑豊の地域性と密接に関係している。

当時、芸妓などの芸能者の社会的地位は低く、家の恥になると親戚からは反対されて本家からは勘当すら受けたが、歌への思いは止み難く、こうめは、石炭と製鉄で栄えていた北九州八幡の芸者置屋「稲本席」に十六歳で入り、「梅若」を名乗った。福岡県民謡どんたく節が、彼女の初座敷での歌だったという。この時期の梅若の人気について松本清張(1909-1992)が『わが半生の記』において言及している。清張が働いていた印刷屋が紙を仕入れていた紙屋が倒産した。「主人が梅若という唄のうまい妓に身代を入れあげたという噂であった。梅若は、のちの赤坂小梅である」と清張は述べている。⁶

転機は昭和4(1929)年に訪れた。当時、お座敷遊びは通人の甲斐性と見なされていたが、小倉を訪れていた野口雨情(1882-1945)と藤井清水(1889-1944)がお座敷での梅若の歌を気に入りに、レコード吹込みに誘った。

きっかけは昭和四年、小倉の料亭「つだくる」に始まる。浅野喜平ひきいる浅野舞踏団に、東京より中山晋平、野口雨情、そして藤井清水といった当時の日本を代表する流行歌の作詞、作曲家を招いたのである。⁷

広島出身作曲家藤井清水は、現在はあまり知られていないが、山田耕作に「私が知っている一番優れた作曲家」、「純粹に日本人の心を作曲した人」と言わしめ、流行歌・童謡作曲家として活躍しながら、民謡研究家町田佳声とともに各地を行脚して民謡採譜を行い、その成果は共著『日本民謡大観』(NHK)に結実している。⁸ 自伝で小梅は藤井を「終生の恩人」と呼んでいるが、出会いの三日後には藤井から「ボクが一世一代、はじめて探しあてた歌い手だ。いちどレコード吹込みをしてみませんか」とい

う手紙を梅若は受け取る。こうしてビクター大阪支店録音所で吹き込んだ野口雨情作詞・藤井清水作曲の新民謡「小倉節」(1929)が、彼女の初レコードとなった。⁹

昭和に入るとレコード産業も成長し、ビクター、コロムビア、ポリドール等、外資系から派生したレコード会社が日本に工場を造り、レコード価格も下ってレコード歌謡が大衆化しつつあった。¹⁰ レコード会社には文芸部が置かれ、文芸部員の作詞家・作曲家は、流行歌制作と流行歌手発掘に余念がなかった。当時、洋楽はまだ耳新しく、民謡や新民謡、そしてそれらをお座敷で歌っていた芸妓出身歌手が流行していた。先輩格の藤本二三吉(1897-1976)を筆頭に小唄勝太郎(1904-1974)と市丸(1906-1997)が競い合うように活躍し、「勝一時代」と呼ばれたが、小梅の登場によって三人は「鶯芸者の御三家」と呼ばれることになる。¹¹ そして芸妓歌手に対抗して佐藤千代子(1897-1968)や藤山一郎(1911-93)などの音楽学校卒業生の活躍も始まり、「流行歌」というジャンルが確立して多数の流行歌レコードが世に出されていった。¹² このように向山コウメは、筑豊炭坑文化の中から芸妓として芸を磨き、勃興しつつあったレコード産業によって発見されて、歌手赤坂小梅となっていくのである。

その後、小梅は、二度目の吹込みとして「粟津小唄」と「金沢小唄」という新民謡を吹き込む。市丸が長野から、勝太郎が新潟から、喜代三が鹿児島から上京して歌手として活躍を始めていたように、小梅も歌の修行に上京し、赤坂若林の「抱え芸者」となり、赤坂小梅を名乗る。ちょうど「新民謡、三弦歌謡曲と称するウタが流行し」、小梅は、コンビを組んでいた太閤(三味線)とともに、これまでの清元・常盤津・俗曲の合間に新しい曲のけいこに熱中した。¹³ 芸者と民謡が切っても切れない関係にあることを小梅は自伝に語っている。宴会の始まる三時間ぐらい前に小梅は宴会幹事と会い、北海道から九州まで全国各地から東京を訪れる客の出身地を尋ねて、「早速、その土地の民謡を調べ、おけいこをして間に合わせ」た。¹⁴ 全国の民謡を覚えることは大変だったが、それが小梅民謡集を後に出せた理由だと彼女は述べている。福岡を代表する民謡となった黒田節の普及は、赤坂小梅のレコードに負うところが大きい。真珠湾攻撃の翌年、昭和17(1942)年に出た赤坂小梅の「黒田節」は、その男性的な野太い武張った節回しで大ヒットとなる。色恋を歌う軟弱な流行歌は、時局に鑑み検閲により発禁処分とな

る唄も多かったが、小梅のレコードは戦時中も流行を維持した。戦後もラジオ・テレビの電波によって民謡歌手として活躍したが、芸妓のお座敷芸として全国各地の民謡に親しみ、民謡・新民謡流行歌手として人気を確立していく赤坂小梅は、「民謡生活一筋の芸歴」による民謡普及や民謡による福祉活動により紫綬褒章と勲四等宝章を授与された。¹⁵ 晩年は平成4（1992）年に85歳で亡くなるまで房総の館山で暮らしたが、郷土の誇りとして今も親しまれ、川崎町キャラクター「小梅ちゃん」が地域振興に貢献している。¹⁶

田村コレクション SP レコード調査：赤坂小梅・「祝目出度」・「福岡行進曲」

九州大学芸術工学部での大島研究室の SP レコード研究・SP レコード公開講座に関して NHK 福岡放送局より取材を受け、九州大学総合研究博物館に寄贈されている田村コレクションの赤坂小梅と博多・福岡関連 SP レコード調査を実施した。¹⁷ 確認された赤坂小梅の SP レコードは末尾に付けた一覧に示す通りである。小梅は、昭和8（1933）年にビクターからコロムビアに移籍し、引退まで五十年間、専属歌手を務めたが、田村コレクションにあるのは、コロムビア社デビュー曲「ほんとにさうなら」も含めて、ほとんど全てがこのコロムビア時代のレコードであり、ビクター時代のレコードは「大垣音頭」と「木曾川節」の2枚しか入っていない。

赤坂小梅が歌った歌のジャンルは、大別すると端唄・小唄・民謡・流行歌である。これらのジャンル名は通常 SP レコードのラベルに曲名とともに印刷されていた。小唄や民謡には後で詳述するようにレコード会社が流行を狙って作詞・作曲家に作らせ、新小唄・流行小唄・新民謡などのジャンル名で売り出したものもある。小梅の場合には芸妓歌手としてのお座敷唄（端唄・小唄・民謡）が多数を占めているが、「ほんとにさうなら」・「そんなお方があったなら」・「ゆるしてネ」等、流行歌も歌っている。SP レコード大衆化初期に鶯芸者レコード歌手は、「ハア小唄」や「ネエ小唄」などのお色気小唄で人気を博し、小梅の「おぼこ可愛いや」は「ハア小唄」、「ほんとにさうなら」と「ゆるしてネ」は「ネエ小唄」の流れに属する。¹⁸

小梅の博多に関する曲としては、お座敷唄として広く歌われていた端唄「博多節」があり、「博多節（博多帯しめ）」と「博多節（百萬石の）」、「正調博多節」が田村コレクションに入っている。『日本民謡辞典』によると、博多帯や筑前しぼりが江戸時代から全国的に流行し、その服飾流行から生まれた江戸末期の唄が「博多節」であったが、「門付け芸人の手によって、博多地方にひろめられ、市内の花柳界のお座敷でも歌われるようになった。」当初の「博多節」は曲中の掛け声にちなみ俗に「ドッコイショ」と呼ばれる古い博多節であったが、門付け芸人の唄として花柳界通人は気に入らず、「博多帯しめ 筑前しぼり 歩む姿が 柳腰」という掛け声の入らない、より新しい「正調博多節」が作られ、「極度に技巧的で」難しい節回しとなった。¹⁹ 小梅の「博多節」・「博多節（博多帯しめ）」・「博多節（百萬石の）」・「正調博多節」からも推測されるが、当時、出身や所属の検番・置屋の地域性を反映しながら、歌詞や歌い方に関して芸妓により多様な博多節がお座敷で歌われていたのである。

小梅が各地で民謡の採取を行い、お座敷で披露していたことはすでに述べたが、小梅の「オテモヤン」は、熊本のお座敷唄で、「ユーモラスでとぼけた熊本弁の歌詞で有名」で、小梅のレコード（1935）により全国的に流行し、「全国各地の花柳界で歌われた騒唄」となり、熊本代表民謡として定着した。²⁰ 戦後に出た SP レコード歌詞カードに見られるように、「オテモヤン」と「黒田節」は後に一枚の SP レコードの表裏に入れられ熊本・福岡代表民謡として広く聴かれた（図3・4）。

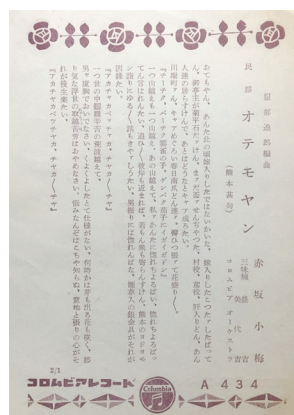


図3 「オテモヤン」歌詞カード

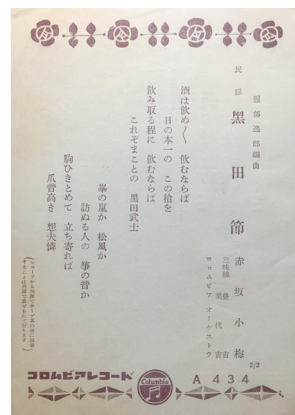


図4 「黒田節」歌詞カード

民謡というとなんが古くから歌い継いできたものとい

うイメージがあるが、「黒田節」に関してもそのようなイメージを大きく裏切る成立・普及の経緯があり、それはラジオという新しいメディアの誕生と密接に関係している。大正14(1925)年にラジオ放送のため東京・名古屋・大阪に三つの放送局が開局したが、他の地方小都市では経営難やプログラム編成の困難等が懸念され、翌年に三局が合同して社団法人日本放送協会が設立されて、東京に本部を置き、全国に七つの支部を設けた。九州では熊本に出力10キロワットの放送局、福岡に「演奏所」というスタジオが設置された。²¹当時、クラシック音楽はあまり普及していなくて、音楽番組の中心は邦楽であった。博多は千人を超える芸妓がいて、四つの検番から順番に芸妓が出演し、博多起源の筑前琵琶や地元民謡を全国に放送していたが、東京・京都・大阪花柳界には当然及ばず、全国的な琵琶曲・語りの衰退もあり、民謡に力を入れていく。昭和5(1930)年頃「博多節」は水茶屋検番名人お秀さんの活躍が全国的に注目を集めたが、全国放送向けプログラム制作には常に苦勞していた。そこで放送係の井上清三は、黒田藩士の勤王志士加藤司書が作った「すめらみくにの…」という時局にかなう歌詞を、中国から雅楽に伝わり、様々な歌詞で各地に歌われていた「今様」の曲調にのせて、演奏所時代昭和3(1928)年に「筑前今様」として放送した。しかし伝統的に手拍子だけの今様は聴取者の反応が芳しくなかったので、三味線・尺八・琴の伴奏をつけ、「黒田武士」として放送したところ全国的に流行することとなった。²²ラジオ放送で文字は見えないので、「武士」が「節」と勘違いされ、やがて母里太平衛に関する歌詞に代わり、小梅はこの「黒田節」を吹き込んで福岡代表民謡として定着させることに大きく貢献した。「黒田節の小梅か、小梅の黒田節か…ひとさまから言われるようになりましたのもこの黒田節のおかげです」と小梅は述べている。さらに「祝い歌黒田節」を後に「新しく自分で節づけをして吹込み、これまた大成功」とあるように「黒田節」は小梅のライフワークであり、新たな新民謡創出にも寄与しているのである。²³

地域性を濃厚に歌詞に取り入れた新民謡は、地名を冠したご当地ソングとして流行して全盛期となる。新民謡というジャンル名がラベルに明記された小梅レコードは多くはないが、田村コレクションには「みなとの祭」と「青すだれ」・「チャッキリ節」の二枚のレコードがある。

「みなとの祭」は西條八十作詞・佐々紅華作曲で、B面には中野忠晴の「みなと行進曲」(西條八十作詞・江口夜詩作曲)が入っていて、神戸港まつりと関連する新民謡である。新民謡とは、『日本民謡辞典』によると、「創作民謡」とも呼ばれ、作詞者・作曲者がはっきりと分かり、厳密には民衆の中から生まれた民謡とは区別される。主として温泉地や観光地が委嘱して作られ、何々小唄・何々音頭という名称の新民謡が多く残っている。²⁴「青すだれ」は野村俊夫作詞・萩原二郎編曲、「チャッキリ節」は北原白秋作詞・町田嘉章作曲・宇賀神美津男編曲である。「チャッキリ節」は、昭和2(1927)年に静岡電鉄が狐ヶ崎遊園地CMソングとして委嘱した静岡観光・物産宣伝歌で、市丸がビクター・レコードに吹き込んで全国的に流行し、新民謡でも最も成功した歌の一つである。²⁵「青すだれ」は、コロンビア専属芸妓歌手先輩藤本二三吉との共演で邦楽伴奏(三味線豊吉・小静・秀夫/鳴物望月太意之助社中)であるのに対して、「チャッキリ節」は小梅が単独でコロンビア・オーケストラ伴奏で歌い、邦楽と洋楽を混交した新民謡の多様な魅力を発揮している。

今回の田村コレクションSPレコード調査によって博多・福岡に関する興味深いご当地ソングがいくつか確認された。赤坂小梅と直接関係するものではないが、民謡・新民謡の地域性を探るための重要な参考資料として「祝目出度」と「福岡行進曲」を紹介する。「祝い目出度」は、宴席やお座敷で披露される博多の祝儀唄であり、博多山笠や宴席等で耳にする機会が多い。田村コレクションに入っているのは、溝上康人のA面「祝目出度」(糸:鶴若/鼓:春枝)/B面「黒田節」(タイヘイ・オーケストラ)のレコード(Taihei M-59)である。このレコードでも邦楽・洋楽伴奏の対比が活かされている。絵入りラベルと黒ラベルの二種類が存在し、絵入りラベルの方がコレクションに入っていて、ジャンルは俚謡と記されている。戦前の民謡は俚謡と記載されているSPレコードが多い。「祝目出度」のラベルでは榎田神社の鳥居と銀杏を、「黒田節」では「酒は飲め飲め…」の母里太平衛の話にちなんだ槍と大杯をあしらっている(図5・6)。溝上康人については他のレコードが確認できないので詳細不明であるが地元の名人か民謡歌手ではないかと思われる。



図5 「祝目出度」



図6 「黒田節」

全国代表民謡 A 面「博多ぞめき」/B 面「福岡行進曲」のレコードは典型的なご当地ソング新民謡レコード(1933/Victor 52863)である(図7・8)。ぞめきとは、浮かれ騒ぐことや遊郭や夜店をひやかしてそぞろ歩くことを意味し、宴席などで歌われた賑やかな騒唄に属す。「博多ぞめき」は、新民謡運動を牽引していた西條八十と中山晋平の作詞・作曲で、歌手は勝太郎である(三味線:千代・いし/洋楽器入)。「福岡行進曲」は、福岡日日新聞社募集一等当選とラベルに記されていて、岩本宗二郎作詞・西條八十補筆・中山晋平作曲で、歌手は藤山一郎、伴奏を日本ビクター管弦楽団が務めている。この新民謡レコードでも邦楽・洋楽伴奏の対比が活かされている。当時、新聞社募集の作詞コンテストがよく行われていた。²⁶ 福岡日日新聞(現西日本新聞)に掲載されたこのレコードの新聞広告が残っていて歌詞も掲載されている(1933年9月26日掲載)。²⁷ 岩本宗次郎(1892-1982)は、大牟田の歌人で、地域の学校校歌や「大牟田行進曲」(1935/東林海太郎歌/大村能章作曲)・「北九州音頭」(1963/江利チエミ歌/神津善行作曲)の作詞を行い、市内の甘木山には歌碑も設けられている。



図7 「博多ぞめき」ラベル



図8 「福岡行進曲」ラベル

「福岡行進曲」は、歌詞一番で玄海灘・日和山・長浜を歌った後、「博多節」に歌われた伝統的な物産の博多帯・

筑前しぼりと博多人形に言及するが、「三日月の宵そぞろ歩く中洲」という都市の新名所も歌っている。日和山は、船乗りが天候を見て出港するかどうか見極める山のことで全国の港町に点在しているが、福岡には確認されない。歌詞は三番から久留米・筑紫へと南下し、久留米がすりが紹介され、四番は大牟田三池炭鉱が取り上げられている。²⁸

三池七山 地下千尺の
闇に掘る炭 砕く岩
男一貫 度胸で暮らせ
ケージまかせの 下り箱

ケージとは坑内に降りる昇降機のこと、小梅の「炭坑節」にも出て来るので作詞家は「炭坑節」を意識していたのかもしれない。「炭坑節」は後で取り上げるように女唄だが、こちらは対照的な男唄であることも興味深い。このように新民謡は都市や近代産業の点景も新たな郷土のシンボルとして取り入れ、新たな民謡の創作につながろうとしたのである。

映画人気が高まり、「道頓堀行進曲」や「浅草行進曲」等の映画主題歌という新しい流行歌が登場したのは、電気録音により SP レコードの音質が飛躍的に改善され、数々の国内レコード会社が設立されて、日本初レコード流行歌者と呼ばれる佐藤千代子(1897-1968)が登場した昭和初期のことである。²⁹ 倉田喜弘によると、「行進曲」とは当時の流行語で新聞・雑誌の見出しなどで「不良少年行進曲、流行行進曲、婦人洋装行進曲、シネマ行進曲」などのように使用されていた。³⁰ 今で言う「犯罪のデパート」や「美食のオンパレード」等に相当する表現であろうか。このような何々行進曲の流行に火をつけたのが映画『東京行進曲』(1929)である。映画主題歌「東京行進曲」(Victor 50755)は、西條八十作詞・中山晋平作曲の新民謡として作られ、伴奏は日活管弦楽団、裏面の「紅屋の娘」とともに佐藤千代子が歌い、二十五万枚の大ヒットとなった。地名を冠したご当地ソング、「丸の内音頭」(1932)・「東京音頭」(1933)等は、レコード会社があつた盆踊りブームによりさらにヒットし、何々行進曲・何々音頭が各地で多数作られた。³¹ 『SP レコード60,000曲総目録』によると、この種の何々行進曲(軍楽隊・ブラスバンド行進曲を除く)は、「東京行進曲」以降のビク

ター盤だけを見ても、「帝都復興行進曲」(51167)・「神戸行進曲」(51389)・「新東京行進曲」/「東京行進曲」(51406)・「京都市行進曲」(51486)・「新東京行進曲」上/下(51503)・「浪花踊行進曲」(51758)・「日光行進曲」(51921)・「上海行進曲」(51962)・「大京城行進曲」(51969)・「威興行進曲」(52063)・「スキー行進曲」(52064)・「満州行進曲」(52134)・「岡山行進曲」(52299)・「ほがらか行進曲」(52420)・「大東京行進曲」(52461)・「小樽行進曲」(52599)・「大大阪地下鉄行進曲」(52722)・「大鋼路行進曲」(52798)・「木浦行進曲」(53152)が記載され、何々行進曲の地方拡散と大陸進出は明白である。³² 「スキー行進曲」の場合には他の社会的流行への便乗もうかがわれる。「福岡行進曲」は、地元でしか流通しなかったのか、昭和館の『総目録』には掲載されていないが、そのレコード番号(52863)から何々行進曲ブームの終わり頃に登場したことが推測できる。

赤坂小梅と炭坑節

小梅が最初に吹き込んだ「小倉節」、二度目に吹き込んだ「粟津小唄」・「金沢小唄」、田村コレクション小梅レコード「みなとの祭」・「青すだれ」・「チャッキリ節」は、いずれも新民謡であり、小梅と新民謡は切っても切り離せない。新民謡とはラベルに書かれていないが、小梅の故郷の地域性の観点から特に興味深い田村コレクション小梅レコードは、「田川小唄」・「九州小唄」・「新九州小唄」である。「田川小唄」(Columbia PR 1351: 鶴田六郎歌共演)の裏面は「炭坑節」でいずれも赤坂小梅が歌っているが、レコード番号に“PR”が入っているので、ご当地ソングとして地域振興のため委嘱されたことがうかがわれる。「九州小唄」は表面が三島一聲、裏面が小梅、「新九州小唄」は表面が藤本二三吉、裏面が小梅で、同一曲を表裏で別の歌手が異なる編曲で歌っている。どちらも作曲は小梅の恩人藤井清水である。

「福岡行進曲」においても博多帯等の名産品に加えて三池炭鉱が歌詞に登場したように、盛時を極めた炭坑産業は、歌の中でも重要な地域のシンボルとなっていた。『日本民謡辞典』によると、「炭坑節」は、本来、採炭・選炭の際の仕事唄であり、大きく「北九州炭坑節」と「常磐炭坑節」の二種類に分類されるが、レコードやラジオに

より民謡として拡散されて、「黒田節」等と同様にお座敷・宴席や盆踊り等の地域のお祭りなどでもよく歌われるようになった。³³

小梅は九州版「炭坑節」(図9)も「常磐炭坑節」も歌っているが、レコードに吹き込まれ全国的に流行した当初の小梅の「炭坑節」(1948)は、一般に普及しているものとは歌詞が異なっていた。現在、よく歌われる炭坑節は、「月が出た出た月が出た(ヨイヨイ) うちのお山の上に出た あんまり煙突が高いので さぞやお月さんけむたかろ(サノヨイヨイ)」という歌詞である。「うちのお山」が「三池炭鉱」となっている歌もよく耳にする。これに対して『小梅姐さん』に紹介される小梅の歌は「一山二山三山越え 奥に咲いたる八重つつじ なんぼ色よく咲いたとて 様ちゃんを通わにゃ仇の花(サノヨイヨイ)」という筑豊の炭坑節で、二番は「香春岳から見下ろせば 伊田の縦坑が真正面 十二時下がりの様ちゃんがゲージに持たれて思案顔(サノヨイヨイ)」と続く。三井炭鉱の煙突は三番の歌詞に出て来る。「一山二山三山」は香春岳のことで、今ではセメント採掘により山頂が削り取られ、本来の山容は見る影もない。³⁴ 様ちゃんとは夫または恋人のことで女性目線の唄であり、山本作兵衛の炭坑絵や手記に見られるように、女性の労働力が炭坑にいかにかかせないものであったかが炭坑節からもうかがわれる。³⁵ ケージについてはすでに説明したように「福岡行進曲」にも歌われている。小梅のCD版「九州炭坑節」では、歌詞一番に三井炭鉱の煙突が歌われているが、香春岳、伊田の縦坑、ケージという言葉は姿を消した。³⁶ 「炭坑節」は、時代や地域の変化や歌い手により変わっていく民謡の柔軟性を示している。



図9 小梅の「炭坑節」



図10 美ち奴の「炭坑節」

民謡を表看板としながら流行歌としてレコード産業の重要な商品となった「炭坑節」は、何々行進曲や何々音

頭と同様に様々なバリエーションを加えて新たに制作され販売された。田村コレクションには小梅の「炭坑節」の他にも「新炭坑節」(Columbia A 480/新民謡/高倉敏・久保幸江歌/野村俊夫作詞・古賀政男作曲・服部逸郎編曲)・「新々炭坑節」(Columbia A 1124/新民謡/久保幸江歌/野村俊夫作詞・服部逸郎編曲)・「炭坑節」(Victor V-40461/新民謡/鈴木正夫・榎本美佐江・喜久丸歌/小野金次郎作詞・佐野鋤編曲)・「炭坑節」(Polydor 7835/流行歌/日本橋きみ栄歌/伊佐見研二作詞・飯田景慶編曲)・「新炭坑節」(Polydor 7835/流行歌/日本橋きみ栄歌/畑山逸雄作詞・飯田景慶編曲)・「炭坑節」(Teichiku C-3120/流行歌/美ち奴歌/大高ひさを作詞・長津義志編曲)・「炭坑節」(King 539/俗曲/音丸歌/松村又一作詞・山口俊郎)があり、レコード各社が「炭坑節」を民謡・新民謡・流行歌・俗曲として出している。演奏者は歌手のみを記載したが、ビクターの「炭坑節」の裏面には日本ビクター管弦楽団による軽音楽版「炭坑節」が吹き込まれている。このよう多様な「炭坑節」レコード存在の背景には、小梅の「さくら音頭」の場合と同様にレコード各社競作があり、「炭坑節」も戦後まもない昭和23(1948)年に各社レコード競作が行われた。レコード業界の巧みな販売戦略により各社「炭坑節」レコードが世を賑わし、「炭坑節」人気を不動の物にしたのであろう。³⁷ ちなみにこの競作で優勢であったのは、美ち奴の「炭坑節」で、彼女だけが「三池炭坑の上に出た」を歌詞に入れることを許可された(図10)。昭和26(1951)年には新東宝より志村敏夫監督・森岡良脚本・古賀政男音楽の映画『月が出た出た』が公開され、市丸と小梅がともに出演している。³⁸

戦後日本復興を歌で元気づけた「炭坑節」は、正に小梅のルーツに直結している。炭坑なくして筑豊各地に芸妓の芸能文化が花咲くことはなかっただろうし、芸妓から小梅という流行歌手が誕生することもなかったはずである。小倉のお座敷で芸妓として活躍していたからこそ、野口雨情や藤井清水に見いだされるという幸運が訪れた。野口雨情・西条八十・藤井清水・中山晋平が牽引した新民謡は、伝承・伝統に頼るだけでなく、洋楽の要素を曲作りに活かし、新たな地域の特性にも注目した。時に都市の新流行や地域に根差した近代産業を歌詞に歌い込み、モダンな風を民謡に吹き込んだのである。小梅は地方に赴いての民謡採集も地道に行っているが、レコード

会社の商魂たくましいビジネス戦略にも支えられ、民謡を流行歌に変身させ、レコード・ラジオ・テレビ・映画・舞台上で活躍し、民謡普及に大きく貢献した。「黒田節」と「炭坑節」はその典型であるが、民謡・新民謡により小梅は郷土への思いを力強く歌い上げている。

注

1. 筑豊の歴史と文化については深町純亮著『炭坑節物語 歌いつくヤマの歴史と人情』(海鳥社, 1997), pp.3-17; NPO 嘉穂劇場企画 DVD『語り部深町純亮が伝える筑豊の歴史と文化』参照。
2. 筑豊の近代化遺産については筑豊近代遺産研究会編『筑豊の近代化遺産』(弦書房, 2008), pp.16-23.
3. 山本作兵衛に関しては山本作兵衛著『筑豊炭坑絵物語』(岩波書店: 2013), 同著『炭坑に生きる 地の底の人生記録』(講談社: 2011), 有馬学・他著『山本作兵衛と日本の近代』(弦書房, 2014), 上野朱著『山本作兵衛と炭坑の記録』(平凡社: 2014), ドキュメンタリー映画 DVD『坑道の記憶～炭坑絵師・山本作兵衛～』(RKB 毎日放送: 2015) 参照。
4. 田村コレクション (SP レコード) に関しては、『九州大学総合研究博物館ニュース』No.27 (2017), pp.3 & 5.
5. 赤坂小梅著『女の花道』(けいせい出版: 1981), pp. 31-33. 以下、赤坂小梅の伝記的事実や芸能人生に関しては本書とドキュメンタリー映画 DVD『小梅姐さん』(赤坂小梅生誕100年記念映画製作上映委員会: 2007) による。
6. 松本清張著『半生の記』(新潮社: 1966), p. 63.
7. 『女の花道』, p.101.
8. 藤井清水については、関定子(ソプラノ) / 塚田佳男(ピアノ) 演奏 CD『藤井清水歌曲集』(恵雅堂: 1995): 金大一春彦著「藤井清水の作品について」& 小山晃著「解説」参照。
9. 小梅の「小倉節」・「黒田節」・「炭坑節」は『小梅姐さん』に収録されている。
10. 高護著『歌謡曲 時代を彩った歌たち』(岩波書店, 2011), pp.2-5.
11. 『女の花道』, p.150.
12. 「歌謡曲」というジャンル名が「流行歌」にとって代わり普及するのは戦後のことである。
13. 『女の花道』, p.99.
14. 同書, p.120.
15. 同書, p.314.『小梅姐さん』解説書には赤坂小梅が歌った全国の民謡約230曲が県別に日本地図上にまとめられている。その中には「鴨緑江節」、「朝鮮音頭」、「台湾音頭」等、戦時中に慰問公演で訪れた中国・台湾・韓国等の歌も含まれている(『女の花道』, pp. 192-217)。
16. 川崎町ホームページには「小梅ちゃん」キャラクターが登場し、赤坂小梅に関する紹介も掲載されている。川崎町 PR 動画「チックホー!!!!!!」にも小梅は取り上げられている。
17. 取材・調査の内容は「音のタイムカプセル」(中野貴世報

- 告)というタイトルでNHK総合・福岡放送ニュース番組「ロクいち!福岡」(2017年3月31日放送)において紹介され、九州・沖縄放送「おはよう九州沖縄」(同年4月3日)・全国放送「おはよう日本」(同年5月6日)で再放送された。調査で見つかった博多の唄を聴く鑑賞会が同年4月9日に九州大学総合研究博物館で開催された。
18. 「ハア小唄」は小唄勝太郎の「島の娘」(1933)、「ネエ小唄」は渡邊はま子の「忘れちゃいやヨ」(1936)が大流行し、「ハア小唄」・「ネエ小唄」ブームに火をつけた。
 19. 『日本民謡辞典』, p.266.
 20. 同辞典, pp.85-6.
 21. NHK福岡を語る会編『博多放送物語 秘話でつづるLKの昭和史』(海鳥社, 2002), p.14.
 22. 同書, 「芸妓でもった邦楽番組*「黒田節」誕生秘話」(pp.43-4).
 23. 『女の花道』, pp.226-33 & 278. 同書(p.293)では永井孝男伝として小梅はNHK紅白歌合戦第1回(1951)・第4回(1953)・第6回(1955)・第7回(1956)に出演して「黒田節」を歌ったとあるが、曲名は記憶違いのようで、実際は「炭坑節」(第1・7回)と「オテモヤン」(第4・6回)だった。
 24. 『日本民謡辞典』, pp.190-1.
 25. 同辞典, p.220.
 26. 倉田喜弘著『日本レコード文化史』(2006)によると、「満州の歌」(1932/報知)・「肉弾三勇士の歌」(1932/朝日)・「爆弾三勇士の歌」(1932/毎日)等の時局レコードも新聞社懸賞募集で生まれた(pp.205-6)。小梅の「中京小唄」(Columbia 27600)もラベルの記載によると「新愛知新聞社懸賞当選歌」である。「みなとの祭」は他のレコード会社の盤も出ているが、タイヘイ盤「みなと音頭」(幾松歌)／「神戸みなとの祭」(巴・小はん歌)は、「神戸市民祭協会推薦・懸賞募集一等当選歌／第一回神戸『みなとの祭』主題歌」とラベルに記載されている。
 27. NHK「音のタイムカプセル」.
 28. 歌詞四番は上記広告に記載されていないのでレコードからの聴き写しである。
 29. 倉田喜弘著『「はやり歌」の考古学 開国から戦後復興まで』(文芸春秋, 2001), p.164; 塩澤実信著『昭和の流行歌物語 佐藤千代子から笠置シズ子、美空ひばりへ』(展望社, 2011), pp.9-20.
 30. 『日本レコード文化史』, pp.176-7.
 31. 『昭和の流行歌物語』, pp.39-42. 翌年に出た小梅の「さくら音頭」(1934)もこのジャンルに属している。
 32. 昭和館監修『SP盤レーベルによるSPレコード60,000曲総目録』(アテネ書房, 2003), pp.308-34. 西沢爽著『雑学東京行進曲』(講談社, 1984)によると、行進曲流行歌第1号「道頓堀行進曲」(1928)や「浅草行進曲」(1928)など行進曲に力を入れていたニッター・レコードは、翌年、「六大都市行進曲」として「東京行進曲」・「横浜行進曲」・「名古屋行進曲」・「大阪行進曲」・「神戸行進曲」を次々と世に出した(pp.154-63)。
 33. 『日本民謡辞典』, pp.122-3. 炭坑節のルーツに関しては『炭坑節物語』, pp.18-21.
 34. 『筑豊の近代化遺産』によると、「炭坑節」の元唄をめぐり歌詞の煙突が田川三井炭鉱のものか、それとも大牟田三池炭鉱のものかという論争が過去にあった。調査の結果、今は決着し、田川市石炭記念公園に「炭坑節発祥の地」記念碑がある(p.19)。田川市三井炭鉱の二本の煙突に関しては朝日新聞筑豊支局編『ふるさと筑豊 民話と史実を探る』(朝日カルチャーセンター, 1993), pp.282-5. ボタ山と「白ダイヤの山」と呼ばれた香春岳については深町純亮著『筑豊の今昔』(郷土出版社, 2009), pp.76-7. 「炭坑節」の主要な元唄に関しては田川市石炭資料館編CD『香春岳から見下ろせば～炭坑節の源流～』(Columbia COCJ-31766, 2002)で聴くことができる。
 35. 炭坑内での女性の労働については、『炭坑に生きる』, pp.94-103. 作兵衛は心にしみる「坑内歌」も同書にいくつか書き残している。
 36. CD『スター★デラックス 赤坂小梅』(Columbia COCP-37375, 2012)は、「九州炭坑節」と「黒田節」も含めて、小梅の代表曲20曲を収録している。小梅は、「三池炭坑節」や「正調炭坑節」なども歌っている。
 37. 南洋二監修・解説LPレコード集『オリジナル原版による戦前昭和歌謡』(Columbia CHS-30411-23, 1985)解説によると、「さくら音頭」(1934)は、ビクター・コロムビア・ポリドール・テイチクが異なる歌手・作詞家・作曲家によるレコードを競作で出し、同名の映画もP.C.L.(現東宝)・日活・松竹・新興・大都が異なる監督・俳優を起用して競作で公開している(p.54)。
 38. 映画.com:『月が出た出た』[<http://eiga.com/movie/73839/>](2017.11.9参照). 民謡歌いの役で小梅が出演した映画と新派芝居「さのさ節」については『女の花道』(pp.278-9 & 291-7)・『小梅姐さん』で紹介されている。

Received November 18, 2017; accepted December 1, 2017

《田村コレクション赤坂小梅 SP レコード一覧》

* ほぼすべて Columbia 社レコードで、会社名は表記が異なる場合のみ記載する。

* データベース番号順に記載し、同一曲が複数入っている場合は、初出のみ記載した。

* 伴奏は邦楽演奏家を中心に記載し、コロムビア楽団・オーケストラ等は省略したことがある。

DB 番号	種 目	曲 名	伴奏・他	SP 番号
SP01020009	端唄	会津磐梯山 (長谷川一夫振付名曲集)	三味線豊吉・佐藤／囃子望月齊八郎社中	A 1239
SP01020017	端唄	浅くとも／主さんと	三味線三代吉・喜美栄	A 683
SP01020097	端唄	秋の夜	三味線三代吉	27982
SP01020098	端唄	夕暮れ	三味線三代吉	27982
SP01020187	端唄	青柳	三味線三代吉・喜美栄	27384
SP01020312	民謡	会津磐梯山	三味線豊吉・佐藤／囃子望月彦八郎	A 1293
SP01021267	端唄	御所の御庭	三味線喜美栄・梅吉	28673
SP01021268	端唄	磯節くづし	三味線喜美栄・梅吉	28673
SP01021499	端唄	玉川	三味線喜美栄・梅吉	28958
SP01021500	端唄	一聲は	三味線喜美栄・梅吉	28958
SP01021817	端唄	春雨	三味線三代吉・喜美栄	27662
SP01021818	端唄	びんほつ	三味線三代吉・喜美栄	27662
SP01030545	舞踏小唄	峠	歌共演藤本二三吉／三味線手塚節子・善介・ひろ子	A 108
SP01030823	舞踏小唄	子守	三味線手塚節子・手塚善介	299449
SP01031294	舞踏小唄	東京三番志叟	共演藤本二三吉／三味線手塚節子・手塚ひろ子・手塚善介	S-151
SP01031369	小唄	留めても帰る／義太夫流し	三味線三代吉・喜美栄	28245
SP01031370	小唄	わしが國さ	三味線三代吉・喜美栄	28245
SP01031903	小唄	博多節 (博多帯しめ)	三味線三代吉・喜美栄	26957
SP01031904	小唄	博多節 (百萬石の)	三味線三代吉・喜美栄	26957
SP01032343	小唄	槍さび	三味線三代吉・喜美栄	28276
SP01032344	小唄	二上りびんほつ	三味線三代吉・喜美栄	28276
SP02000058	民謡	馬子唄	尺八菊池淡水／囃梅屋社中	ニッチク 100702
SP02000250	民謡	稗搦節	オークラロ菊池淡水	A 1222
SP02000267	民謡	五ッ木子守唄	三味線豊吉・豊藤	A 2068
SP02000268	民謡	田原坂	三味線豊吉・豊藤	A 2068
SP02000313	民謡	伊那節	三味線三代吉・喜美栄	27420
SP02000314	民謡	木曾節	三味線三代吉・喜美栄	27420
SP02000315	民謡	伊那節／木曾節	三味線豊吉・喜美栄	30325
SP02000316	民謡	ヤンレサ節・ヤレコノショ	三味線豊吉・喜美栄・手塚節子・手塚ひろ子／囃子佳田社中	30325
SP02000414	民謡	ぶらぶら節	尺八菊池淡水	A 2627
SP02000832	民謡	おてもやん	三味線かよ・君栄／琴田中佐智子／オークラロー菊池淡水／囃子玉藻会	A 805
SP02000833	民謡	黒田節	三味線かよ・君栄／琴田中佐智子／オークラロー菊池淡水／囃子玉藻会	A 805
SP02000835	民謡	白頭山節	三味線豊吉・かよ／尺八菊池淡水／囃子望月太意之助社中	A 633
SP02000840	民謡	オテモヤン (熊本甚句)	三味線豊吉・美代吉	A 434
SP02000866	民謡	肥後五十四万石	三味線豊吉・美代吉	A 2798
SP02000917	民謡	鹿児島小原節	三味線豊吉・君栄／囃子梅屋社中	ニッチク 100710
SP02001012	民謡	大垣音頭	三味線喜美栄・三代吉	Victor 51917
SP02001077	民謡	博多節	三味線豊吉・君栄／囃子梅屋社中	A 41
SP02001083	民謡	炭坑節	三味線豊吉・美代吉	A 460
SP02001139	民謡	ヤンレサ節	三味線三代吉・君勇	27814
SP02001348	民謡	九州小唄	コロムビア・オーケストラ	26919
SP02001356	民謡	木曾川節	三味線同・三代吉・喜美栄	Victor 52222

SP02001758	民謡	豪傑節	三味線豊吉・君栄／囃子梅屋社中	ニッチク 100709
SP02002118	民謡	浅間の煙	コロンビア・オーケストラ	A 960
SP02002120	民謡	新九州小唄	三味線小静・宮奴	27837
SP02002164	民謡	清水小唄	三味線三代吉・喜美栄	26969
SP02002299	民謡	田川小唄	歌共演鶴田六郎／三味線豊藤・梅香	PR 1351
SP02002594	民謡	二上り甚句	三味線豊吉・豊文／囃子玉藻会	A 1654
SP02002614	民謡	ノーヘ（農兵）節	三味線三代吉・喜美栄	27702
SP02002680	民謡	関の五本松	三味線豊吉・君栄／囃子梅屋社中	ニッチク 100713
SP02002682	民謡	正調博多節	三味線豊吉・喜美栄・手塚節子・手塚ひろ子／囃子住田社中	303297
SP02002793	民謡	濱唄	三味線豊吉・喜美栄・手塚節子・手塚ひろ子／囃子住田社中	30326
SP02002895	民謡	福島音頭	共演筑波一郎／三味線小静・富奴	27711
SP02002968	民謡	梅干／鹿児島小原節	三味線豊吉・喜美栄	30323
SP02002976	民謡	新庄節	尺八菊池淡水	29463
SP02003937	民謡	のんこの節	三味線豊藤・豊光	A 3217
SP03000215	流行歌	中京小唄	三味線三代吉・喜美栄	27600
SP03000219	流行歌	月は宵から	コロンビア・オーケストラ	27513
SP03000223	流行歌	おばこ可愛いや	コロンビア・オーケストラ	27672
SP03000225	流行歌	ほんとにさうなら	七孔尺八川本晴朗	27404
SP03000247	流行歌	そんなお方があったなら	コロンビア・オーケストラ	27746
SP03000250	流行歌	野郎やったね（炭坑節）	コロンビア・オーケストラ	A 898
SP03000252	流行歌	ゆるしてネ	コロンビア・オーケストラ	28229
SP03000256	流行歌	さくら音頭	三味線美代吉・三三五・初奴・君弥／合唱松竹少女歌劇団声楽研究科生	27757
SP03000270	流行歌	いきな水兵さん	コロンビア・オーケストラ	28383
SP03000272	民謡舞踊	そろばん踊り	三味線豊吉・梅香	A 2575
SP03000273	民謡舞踊	ふぐ踊り	三味線豊吉・梅香	A 2575
SP03000274	流行歌	佛印情緒	コロンビア・オーケストラ	100431
SP03000278	流行歌	子守	コロンビア・オーケストラ	A 351
SP03000336	新民謡	青すだれ	歌共演藤本二三吉／三味線豊吉・小静・秀夫／鳴物望月太意之助社中	A 776
SP03000337	新民謡	チャッキリ節	コロンビア・オーケストラ	A 776
SP03000606	流行歌	浪子と武男	歌共演伊藤久男／コロンビア・オーケストラ	28652
SP03008492	新民謡	みなとの祭	コロンビア・オーケストラ	27608
SP03010131	流行歌	峠	歌共演藤本二三吉／三味線手塚節子・手塚善助・手塚ひろ子／囃子住田社中	30312
SP03010180	流行歌	和楽踊り	歌共演伊藤久男／三味線小静・富奴／鳴物・はやし連中	27892
SP03010799	流行歌	晴れて逢う夜は	コロンビア・オーケストラ	28166
SP03013786	民謡	常磐炭坑節	コロムビア合唱団／三味線豊吉・豊藤	A 2949
SP03013994	民謡	豪傑節（明治・大正・昭和）	三味線豊吉・喜美栄・手塚節子・手塚ひろ子／囃子住田社中	30326
SP03014172	民謡	長谷川一夫振付名曲集～ 民謡 会津磐梯山	三味線豊吉・佐藤／囃子望月彦八郎社中	A 1293
SP03014184	民謡	ホツチヨセ／ボンチ可愛いや	三味線豊吉・喜美栄・手塚節子・手塚ひろ子／囃子住田社中	30328
SP03014185	民謡	新磯節	三味線豊吉・喜美栄・手塚節子・手塚ひろ子／囃子住田社中	30328
SP03014188	民謡	蒙疆節	三味線豊吉・喜美栄・手塚節子・手塚ひろ子／囃子住田社中	30324

Koume Akasaka and the Culture of the Coal Mining Area of Chikuho – the Locality of New Balladry

Hisao OSHIMA

Faculty of Design, Kyushu University: 4-9-1 Shiobaru, Minami-ku, Fukuoka, 815-8540, Japan

Koume Akasa (1902-92) was born and grew up in the once-prospered coal mining area of Chikuho; she learned singing as a *geisha* performer in a local *geisha* company, became a popular ballad and folksong singer in Tokyo, and contributed much in establishing and promoting folksongs and new balladry in the Showa period. Through the research of the gramophone records of folksongs and new balladry by Koume and about Hakata/Fukuoka in the Tamura Collection, this paper aims to examine the unique locality of the folksongs and new balladry, promoted by the business strategies of Japanese gramophone record companies as well as popularized through new media such as radio, cinema, and TV.

Key words: Koume Akasaka, Chikuho, Culture of Coal Mining Area, Locality, New Balladry